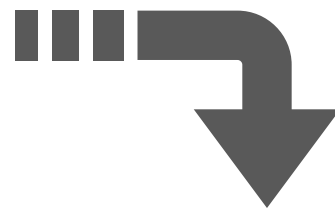


タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」



第10回：第2章-その3-

今、この本



著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

ワークショップ前夜

「またかよ…」

2022年1月29日に予定されたワークショップ「対人援助実践をレポートするさらなる一冊」の実施前に行われた zoom ミーティングにおいて、私の脳内で強烈に浮かびあがった言葉が上記のものでした。

2021年に実施された「対人援助実践をレポートするこの一冊」においても結局、紹介された書籍は「この一冊」どころか複数冊ありました。この確信犯的掟破りが2022年にも繰り返されたのです。しかし私もさすがに学習しており、あらかじめ紹介する本を何冊か用意していたため難を逃れることができました。

ということで、私がこのワークショップで挙げさせていただいた本は、①「療育とはなにか」と、②「自閉症の世界-多様性に満ちた内面の真実-」の2つでした。

① 「療育とはなにか」 高松鶴吉・1990年発刊

ワークショップで最初に挙げさせていただいたのが、本書です。この本に出会ったきっかけですが、前提としてまず私は、児童発達支援管理責任者として障害児支援の現場に携わっています。障害児支援の現場で常に聞く言葉として、「療育」というものがあります。「治療的教育」の略称が「療育」ですが、実は法律的には定義されていません（しかし、法律内に「療育」という言葉は用いられているという…）。

そのために、現場にいる感覚だと、それぞれの対人援助職者が使う「療育」には、その内容やニュアンスにかなりの多様性がみられます。しかし実際の支援に従事し、さらに様々な対人援助職者と連携する（しなければならない）

現場の人間としては、正しい療育の定義よりも、「療育に従事する対人援助職者にある多様



性の源流としての療育とは？」について知りたいという思いがありました。その中で出会ったのが、本書です。

本書では療育に関して、「療育とは情念であり思想であり科学システムである」と述べられています。この記述はシンプルながらも、私にとっては腑に落ちるものでした。療育に携わる多様な対人援助職者の中には、ある人は強い情熱（情念）が先んじ、またある人は障害者福祉に対する理想（思想）を胸に、また別の人はエビデンス（科学システム）を重んじ…。上述した対人援助職者の多様性は、情念と思想と科学システム、まさに三位一体とも言えるそれらのバランスや重点によって多様性が生まれているという示唆が得られたのが、私の対人援助観のリポートにつながりました。

② 「自閉症の世界-多様性に満ちた内面の真実-」

スティーブ・シルバーマン著・2017年発刊

ワークショップにおいて、2番目に挙げさせていただいたのがこちらです。実は最初、この本を紹介しようとは思っていませんでした。しかし、上述の「療育とはなにか」を読み込んでいくうちに、「こちら側（支援者側）にとっての療育という視点に偏ってないだろうか？あちら側（当事者）にとっての支援とは？」という疑問が頭をもたげ、以前読んだ本書の内容を想起して読み直した次第です。

本書は、自閉症をめぐる様々な誤解と偏見、脳多様性（ニューロダイバーシティ）への理解へといたる歴史的背景が語られています。しかし私が後頭部をガツンと叩かれたような衝撃を受けたのは、本書の中盤以降で述べられているジム・シンクレアの「我々を憐れむな」というスピーチです。彼はスピーチにおいて、自閉症を有する子どもを持つ親や、その支援者に対して、次のような言葉を述べています。

すなわち、「ぼくたちの存在を嘆くみなさんの声は、ぼくたちにはそう聞こえます。回復を祈るみなさんの声は、ぼくたちにはそう聞こえます。みなさんのぼくたちに対する心からの希望と夢について聞かされると、ぼくたちはこう思うのです。ある日ぼくたちの存在が消えてなくなり、代わりにやってきた、ぼくたちの顔をした他人をあなたたちは愛する、それがみなさんの最大の望みなんだと。」。

“障害を治療する”という療育、そもそものこの出発であり前提でもあるこの視点にこそ、特権的でパターンリスティックな要素が内在している可能性を気付かせてもらったという点で、本書は私の対人援助観をリポートしてくれました。



対人援助観の止揚（アウフヘーベン）

本番のワークショップでは述べませんでした，上記2冊が私の対人援助観をリポートしてくれたと述べたものの，実は今の私はリポートしきれていない状態でもあります。パソコンで例えると，パソコンの再起動を選択したものの，まだパソコンの画面がついていないような状態です（分かりにくいメタファーで申し訳ありません）。

なぜなら，上記2冊が示唆する内容が，対人援助観という次元からすると真逆のベクトルにあるためです。すなわち，療育をすべきか，すべきでないか…という。しかしそれら2つのベクトルは矛盾しつつも，その矛盾を内在して対人援助の実践に至ることこそが自身の対人援助のリポートなのではないかと内省してもいます。

私の対人援助観の止揚が，どのようなリポートとなるのか，また別の機会にご報告させていただけたら幸いです。

—つづく—